

# 『英語教育』誌の Question Box 欄によせて

小林 資 忠 (英語教育講座)

A Contribution to the Question Box in the English Teachers' Magazine

**Yoshitada KOBAYASHI**

愛媛大学教育学部紀要

第 56 卷 抜刷

平成 21 年 10 月

## 『英語教育』誌の Question Box 欄によせて

(英語教育講座) 小林 資 忠

### A Contribution to the Question Box in the English Teachers' Magazine

Yoshitada KOBAYASHI

(平成21年6月5日受理)

#### はじめに

教師として授業を行っているとき、生徒や学生から質問を受けることも多いと思われるが、教室を離れた一般人で、英語に興味を持っている人からの質問に答えることもWebや雑誌を通して行われている。本稿では、ここ数年間に筆者が関わった『英語教育』(大修館書店)誌上での質問とそれに対する回答の一部を紙面の許す限り提示し、参考に供したい。筆者の回答は雑誌に発表後、加筆・訂正されていることをあらかじめご了承ください。

#### 1. 数式の英語表現について

**Q.** 『ジーニアス英和辞典 第3版』(G<sup>3</sup>) の見出し語 **calculation** の **関連** の欄に次のような記述が見られます。

[足し算の読み方]  $8+5=13$  は Eight and [plus] five are [ is, make(s), equal(s)] thirteen. と読む。

上の記述では make(s), equal(s)のように、sにカッコが付いています。つまり、sはあってもなくてもどちらでもよいと言っています。本当にそうなのでしょう。sは必ず必要であり、なければ誤りになるのではないのでしょうか。

$8+5=13$ の英語表現は、plusを使った場合、Eight plus five equals thirteen. であり、 $2+2=4$  であれば、Two plus two equals four. です。カッコを削除すべきだと思いますが、いかがでしょうか。

(大阪府 H. N.)

**Ans.** 内容を分かりやすくするために、ご質問の英語表現を次のように整理してみます。

- (1) Eight and five is [are] thirteen.
- (2) Eight and five makes [make, equals, equal] thirteen.
- (3) Eight plus five is [×are] thirteen.
- (4) Eight plus five makes [equals, ×make, ×equal] thirteen.

これらの英語表現のうちで、andを用いた(1)、(2)の用例は、主語を単数とみなすか、複数とみなすかの問題と関連していますが、多くの英英辞典、英和辞典に見られ、すべて正しい英語表現と考えられます。筆者が質問したアメリカ人のインフォーマントは単数の主語に呼応する動詞 (is, makes, equals) の方が自然なように思えるが、複数の主語に呼応する動詞 (are, make, equal) を用いても良いだろうと述べました。他方、plusを用いた(3)、(4)の場合は単数の主語に呼応する動詞 (is, makes, equals) のみ可能であると考えられます。このことに関して、上述のインフォーマントは “The sum of eight plus five is [equals] thirteen.” が頭にあるからかもしれないと付け加えました。代表的な英語の語法書 M. Swan, *PEU*<sup>3</sup> (p.366) には British English の数式表現として、次のように informal, formal のラベルも表示しています。

- (5) Two and two is/are four. (informal)
- (6) Two plus two equals/is four. (formal)

以上で理解されると思いますが、andを用いた場合は、単数・複数の主語それぞれに呼応する動詞の使用が可能ですが、plusを用いた場合は、単数の主語に呼応する動

詞しか認められません。またインターネットからも情報が得られると思いますが、“Academic English and Concord: Science and Math”について述べられた記事の中の次の文は参考になるかと思しますので、記しておきます。

“To remind children that the math English differs from conversational English, teachers are told to read 1+2=3 as one plus two equals three rather than one and two is three.”

なお、G<sup>3</sup>の該当箇所は、ご指摘のように、誤解を招く書き方なので、次の改訂では、「Eight and five is [are, make(s), equal(s)] thirteen. / Eight plus five is [makes, equals] thirteen.と読む。」のように、書き改めたいと思います。

## 2. bullying について

Q. 「いじめ」という表現についてお尋ねします。『ジーニアス英和辞典』（初版）で「いじめ」を引くと、次のような表現が見られます。

いじめ **bully** ㊦ 弱いものいじめ

㊦ ～っ子 **bully** ㊦; **ruffian** ㊦ がき大将

「いじめ」を英語で **bullying** と言い、**bully**とは言いません。**bully** は名詞で、「いじめっ子」であり、動詞で「いじめる」という意味です。ですから改訂版では、**bully** を **bullying** に訂正する必要があると思いますが、いかがでしょうか。

次に、『ジーニアス英和辞典 第3版』（G<sup>3</sup>）の **bullying** の欄には次のような意味と用例が提示されています。

**bul·ly·ing** ㊦ ㊦ (弱い者) いじめ // victims of ~ いじめの被害者 / the problem of ~ いじめの問題 / There is a lot of ~ at my school. 私の学校にはいじめが多い。

『ジーニアス英和辞典』では、「いじめ」に対して㊦とあり、G<sup>3</sup>では、**bullying** に㊦と表示がなされています。両辞典とも大修館書店発行です。**bullying**の扱いは㊦と㊦のどちらでもよろしいのでしょうか。つまり、次のよ

うにも表現できるのでしょうか。

There are a lot of bullyings at my school. 私の学校にはいじめが多い。 (大阪府 H. N.)

Ans. 『ジーニアス英和辞典』（初版）の記述には、ご指摘のように不備がありました。『ジーニアス英和辞典』（第2版, 2003年）では、その箇所が訂正されて次のようになっています。

いじめ [苛め] **bullying** ㊦ 弱い者いじめ // 私の学校にはいじめが多い。 There is a lot of bullying [×teasing] at my school.

㊦ いじめっ子 **bully** ㊦

これによって第1のご質問は解決したことになります。第2のご質問ですが、『ジーニアス英和辞典』（第2版）とG<sup>3</sup>の **bullying** の扱いは両方とも㊦表示になっていますので、統一が取れていることになります。

そこで、ご質問の最後の英文 **There are a lot of bullyings at my school.** は誤った文であることがお分かりいただけたと思います。手元の英英辞典にも **bullying** には㊦が付けられており、次のような例が載っています。

(1) *Bullying* is a problem in many schools. (OALD<sup>7</sup>, CALD<sup>3</sup>)

(2) He refused to give in to *bullying* and threats. (OALD<sup>7</sup>)

(3) an attempt to tackle the problem of *bullying* in schools (LDOCE<sup>5</sup>)

また、BNCを検索してみると、次のような例が見られましたので、参考にしてください。

(4) There's widespread *bullying*.

(5) No, I don't want him to go to a school where there's a lot of *bullying*.

## 3. a husband and wife について

Q. 『ジーニアス英和辞典 第3版』（G<sup>3</sup>）の見出し語 **of** の語義2に次のような記述が見られます。

2 [記述] …の性質を持つ、…の《◆…》 // …/ a husband and wife of 20 years 結婚して20年になる夫婦 / …

この前置詞 *of* は、関係代名詞を使わずに済む便利な用法であると小生は思っています。お尋ねします。*wife* の前にも冠詞 *a* は必要なのではないでしょうか。脱落していませんか。(大阪府 H. N.)

**Ans.** このご質問は、G<sup>3</sup>やG<sup>4</sup>の **husband** 図1にも関連しています。そこには、**husband and wife** の無冠詞の用例と共に、語法の注記として「(1)無冠詞の場合が多い。(2)×*wife and* ～とは通例いわない。cf. **BRIDE and groom**. (3)…」が記載されています。この表現は対になって用いられているということから、無冠詞で使われることが多いのですが、*a [the] husband and wife* の形もよく使用されています。また形容詞的に使用されて名詞を修飾することもあり、少し堅い言い方である *man and wife* より一般的な表現(『英語基本名詞辞典』, p.1783)と考えられています。

また *OALD*<sup>7</sup> の **husband** にある成句 **husband and wife** には “a man and woman who are married to each other” の説明があり、その後、*They lived together as husband and wife (= as if they were married) for years.* の用例があります。BNCからも少し用例を載せておきます。

- (1) ... in the ordinary case where *husband and wife* live together, and ....
- (2) ..., Harris and Mastroantonio are *a husband and wife* with marital troubles.
- (3) There may be many reasons why *the husband and wife* do not make any formal agreement about separation, but ....
- (4) ... be heading towards *a husband and wife* relationship; ...
- (5) Now look at the following transcripts of exchanges between *a husband and wife*.

それで、このように対になって用いられる場合には、*(a [the]) husband and wife of 20 years* のように使用され、特に、*wife* の前の(不)定冠詞は通例省略されるように思われます。これは *a knife and fork* の表現にも相通じるものがありますので、『英語語法大事典・第4集』(p.184, No.33)を参照されるとよいでしょう。なお、筆者が尋ねたアメリカ人もこの場合は *(a [the])*

*husband and wife of 20 years* の表現を自分は用い、文脈によっては *husbands and wives of 20 years* も使用すると述べました。*(a [the]) husband and wife* は「夫婦」の意で、比喩的に単数と感じられても、文法的には複数を表すことが(1), (3)や次のBNCの(6)からも理解されたいと思います。

- (6) Usually *a husband and wife* are regarded as living together if they are not separated under a court order ....

もちろん、文脈によっては、本欄回答者の中邑光男氏から提供していただいた次の例にも見られるように、「夫と妻」として独立性[個別性]が強く意識されて、*a husband and a wife* や *the husband and the wife* として用いられていることも事実です。

- (7) All Curtis had to do was look to his left and there was his lovely wife Julie. It has often been said that *a husband and a wife* can't work well together, but nobody told Johnny & June Cash that and it doesn't seem to be a problem for Curtis and Julie either. (*Eureka Times Standard*, February 22, 2007)
  - (8) Let's start with the early marriage laws in the United States. What did those early marriage laws say about what marriage was and what the role of *the husband and the wife* within marriage would be? (*Fresh Air* [National Public Radio, April 15, 2004])
- 以上、ご参考になれば幸いです。

#### 4. have been to について

**Q.** He has been to Switzerland since Saturday. (彼は土曜日からスイスに行っています。)と言えますか。あるメールマガジンの文法講座に出ていた英文です。He is in Switzerland. の現在完了形ですから、He has been in Switzerland since Saturday. ではないかと調べていたら、次のような例文が見つかりました。

“Where have you been?” “I have been in the garden.” 「今までどこに行ってたの。」 「ずっと庭にいました。」 「ずっと庭で何かしていました。そして、今ここへ戻ってきたところです。」 (『英文法総覧(改訂版)』開拓社, p.286)

それで、冒頭の文は He has been in Switzerland

since Saturday. ではないかとメールマガジンの発行人に問い合わせたところ、間違いではない、ネイティブチェックも済ませているという返事でした。どのように考えればよいのでしょうか。 (京都府 S. S.)

**Ans.** 結論から申しますと、He has been to Switzerland since Saturday. は以下の調査結果から正しくない表現だと考えます。周知のように、have been to ... は「…に行った [来た] ことがある」(経験)と「…に行ってきたところだ」(完了)の意を表します。また、文脈によっては、出身校を表すときに用いられ、米国では have been in ...の代わりに使用されて、「…にいたことがある」の意でも用いられるようです(『現代英語語法辞典』,三省堂, p.568)。お示しの文 He has been to Switzerland since Saturday. のsinceは起点を表す前置詞で、「土曜日の時点から今に至るまでずっと」の継続の意味を表しますから、“He has been to …”とは相容れないことになり、違和感を起こさせるのではないのでしょうか。筆者の尋ねたアメリカ人インフォーマントもこの文は使用しないと明言し、ご質問にあります He has been in Switzerland since Saturday. (彼は土曜日以來ずっとスイスにいます。)の文を支持しました。

また、ご質問に示されている “Where have you been?” “I have been in the garden.” も「今までどこにいたんだい。」「ずっと庭にいたんだよ。」の意を表す対話と考えても、何らおかしくはありません。それで、(3)として since Saturday を用いない文も加えて、次の3つの文について、本欄回答者の中邑光男氏に願って、3人のインフォーマント(カナダ人、ニュージーランド人、アメリカ人各1人)に意見を求めていただきました。

- (1) He has been to Switzerland since Saturday.
- (2) He has been in Switzerland since Saturday.
- (3) He has been to Switzerland this month.

その結果、3人全員が(1)の文は正しくないと言っています。3人のインフォーマントの反応を簡単にご報告しておきます。

**カナダ人**

(1)は “not correct” であり、has been to は “a completed experience” を示す。(2)は correct である。(3)も correct であり、彼は今スイスから戻ってきていること

を暗示している。

**ニュージーランド人**

(2),(3)は correct であるが、(1)は incorrect である。(2)は、彼は現在スイスにおり、土曜日以來そこにずっといることを表す。(3)は、今月のあるときにスイスに出かけ、今はスイスから戻ってきていることを表す。

**アメリカ人**

(2),(3)は correct であるが、(1)は wrong である。このアメリカ人は “since Saturday” と “has been” について、さらに次のように追加説明をしていますので、参考のため記します。

Because we say “since Saturday” that means he is still there. So, he has to be IN that place as it’s close by. So, only (2) is possible.

Also “has been” means that he was there but is not there now. So, he was in some place far away, so we treat it like a spot on the map with “to.” So, (3) is possible. But, (1) is never possible.

以上、筆者の尋ねたアメリカ人と同様に、3人のインフォーマント全員が(1)の文は正しくないと言っていることをご報告いたします。なお、少し付け足しておきますと、He’s gone to Switzerland since Saturday. のように変えた場合、筆者が尋ねたアメリカ人は、自分は使用するのに抵抗があるが、人によっては用いるかもしれないという反応を示しました。この表現との混交あるいは類推によって、He’s been to Switzerland since Saturday. も、メールマガジンのインフォーマントが認めたように、誤用であっても、実際に使用されているのかもしれない。いわゆる、語法のゆれがこの表現の背後に垣間見られるような気もしています。ご参考になれば幸いです。

**5. black eyes について**

**Q.** 『ジーニアス英和辞典 第3版』(G<sup>3</sup>)の見出し語 **black** **形**1に次のような記述が見られます。

1 黒い、黒色の(↔white) // a huge ~ cloud 大きな黒い雲/ His eyes are ~ . = He has ~ eyes. 彼は目が黒い。

お尋ねします。「大きな黒い雲」の「黒い」はblackを使っ

てもよいと思いますが、「黒い目」という場合、**black eyes** と言えるのでしょうか。「黒い目」は**dark eyes** と言い、**black eyes** とは言わないと思うのですが、どうでしょうか。(大阪府 H. N.)

**Ans.** ご質問の**black** 形 1 については、G<sup>3</sup>, G<sup>4</sup>の両方に上述の用例が見られます。また、G<sup>3</sup>, G<sup>4</sup>の**dark** 形 3 には、「He has dark eyes. 彼の目の色は黒だ (→ **black** 形 1)」とあり、「黒い目」は**dark eyes**でも表されることが理解されるでしょう。この点に関しては、G<sup>4</sup>の**black**を用いた例の後に、(→**dark eyes**, **dark**形 3)を入れておくべきでした。

Webster<sup>3</sup> (2002年版)で見出し語になっている**black eye**はその語義2で“an eye with a very dark iris”と説明されており、OEDS (1972, p.279)にも“Two lovely black eyes”の用例があります。「黒い目」が**black eyes**で表されることは、それなりの文脈があれば、別に不思議なことではないと言えるでしょう。参考のために、**black eyes**の用例を2例追加しておきます。

- (1) ... and presently a lovely Jewess appeared at an interior door and scrutinized me with black hostile eyes. — F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Chap. 9. (下線は筆者、以下同じ)
- (2) He crumpled quite slowly, the surprise still frozen in his black eyes. (BNC)

一方、「black eyes は「黒い目」の意のほか「(なぐられてできた)目の周りの黒いあざ」の意でも用いられる」(『英語基本名詞辞典』, p.548)との説明もありますし、筆者の尋ねたインフォーマントのアメリカ人は、自分は主に、後者の意で**black eye(s)**を使用していると述べました。特に、単数形の a black eye は“give him a black eye”のイディオムに見られるように、「黒いあざ」の意で用いられることがふつうでしょう。それで、黒っぽい瞳をした目はこの両義の紛らわしさを避ける意味もあり、**dark eyes**, **dark brown eyes** などを用いることが勧められるのは当然予想され、実情に合っているように思えます。

G<sup>4</sup>では、**black**のセパコン**black eye**で《◆「黒い目をしている」は I have dark brown eyes.》の語法注記が追加されています。G大でも**black** 形 1 の語法に

「日本人はよく We have black eyes. と言うが dark eyes とするのがより適切；さらに正確には褐色の人が多から dark brown とする方がよいとされる」の説明が入っています。G<sup>4</sup>の**black eyes**は間違いではないが、実際の使用では **dark brown eyes** が勧められるという判断は妥当であると考えられます。G<sup>4</sup>でも、相互参照をいっそう密にすることで、誤解を避けることができると思います。再考の機会を与えてくださったことに感謝いたします。

## 6. wire-to-wire について

**Q.** 次のような英文があります。

“What happened a couple of weeks ago just made me a better player, and made me want to win so bad that I came out really strong this week,” Ochoa said Saturday after her wire-to-wire victory in Takefuji Classic. (*The Japan Times*, Apr. 17, 2006) (下線は質問者)

下線部の **wire-to-wire victory**とはどんな意味なのでしょう。また、『ジーニアス英和辞典 第4版』(G<sup>4</sup>)には、**wire-to-wire**が収録されていません。改訂版には収録されてよいと考えますが、いかがでしょうか。

(大阪府 H. N.)

**Ans.** この表現にあります **wire** の意味を確かめるために、OED<sup>2</sup>(1989)を見ますと、“US. A wire stretched across and above the track at the start and finish of a racecourse”の語義が目にとまり、よく使用される成句として **down to the wire** があることに気づきます。なお、この成句はG<sup>3</sup>に記載されており、G<sup>4</sup>では **go [come, be] (right) down to the wire** の成句に替わっています。そして、OED<sup>2</sup>のこの箇所の下には、(**from**) **wire to wire** の成句が載せられており、“from start to finish of a race”の意味が示されています。この成句はCOD<sup>11</sup>にも((米略式))として採用されるようになりましたが、他の一般の学習英英辞典には載せられていないように思います。

OED<sup>2</sup>にはこの成句を用いた次のような2例があり、副詞句と共に、形容詞句としても使用されていることが分かります。

- (1) Nicklaus ... led from wire to wire in the Hawaiian Open (Golf Tournament). (*State* [Columbia, S. C.], 1974) [下線は筆者, 以下同じ]
- (2) Bertram Firestone's Honest Pleasure wound up his racing for the year with a wire-to-wire victory in the Laurel Futurity last weekend. (*New Yorker*, 1975) (バートラム・ファイアストーンのおネスト・プレジャー [馬の名前] は先週末, ローレルの2歳馬レースで, 最初から最後までトップを守っての勝利で, その年のレースを終了した。)
- ご質問の表現は上の(2)の文に見られるものと同類の表現であり, Oxford University Google Search で検索すると, 約33.8万の用例が確認されます。ここに少しだけ用例を追加しておきます。
- (3) Jacquelin goes wire to wire to win Asian Open, ...
- (4) Ruangkit goes wire-to-wire for medalist honors, ...
- (5) Nirat closes out an easy wire-to-wire win at the TCL Classic, ...
- (6) Ohno leads wire to wire for gold in 500 meters.

またこの“a wire-to-wire victory [win]”は競馬, ゴルフ, 野球, さらにラクロス, ボーリング, バスケットボールなどのスポーツの分野で用いられており, 専門用語に入るためか, この表現を知らないアメリカ人もいるようです。日本では、『ランダムハウス英和大辞典』(第2版), 『リーダーズ・プラス』, 『最新英語情報辞典』(第2版), 『グランドコンサイス英和辞典』, 『英辞郎』, などに見られ, 「最初 [スタート/初戦] から最後 [決勝戦] までトップを切った勝利」などに類する意味が載せられています。やや小型の学習辞典では, 唯一, 『プログレッシブ英和中辞典』(第4版)が **wire-to-wire** を見出し語に立て, 「[スポーツ] 初めから首位独走の」としているのが目立ちます。ちなみに, この表現を別な言い方に替えた場合, 筆者が尋ねたアメリカ人は“a start-to-finish victory [win]”を示してくれました。また「ぶっちぎりの優勝」を『研究社新和英大辞典』(第5版)では“winning a victory by a huge margin”として英訳しています。

なお, 上で述べましたように, COD<sup>11</sup>を除いて, 一般の学習英英辞典にはこの表現への言及がありませんので, 『ジーニアス英和大辞典』に載せるのはよいとしても,

『ジーニアス英和辞典』に採用する必要は今のところないのではと考えます。

## 7. 前置詞 of と to の用法

Q. 『ジーニアス英和辞典 第3版』の **handle** 名 1 には, 次のような意味と用例が提示されています。

1 取っ手, 柄, ハンドル 《◆自動車の「ハンドル」は (steering) wheel, 自転車の場合は handlebar》// the ~ of the cup カップの取っ手。

ところで, 次のような英文を目にしました。

He was about to close the drawer, leaving the contents undisturbed, when an item of even more remarkable usefulness caught his eye. It was the broken handle to the desk's bottommost drawer, and no one but Harry knew what a truly useful little tool it was. — John Irving, *A Widow for One Year* (Ballantine Books, 1999), p.425. (下線は質問者)

下線部は, 「机のいちばん下の引き出しの壊れた取っ手」と訳せます。つまり, 「…の取っ手」という場合, 使われる前置詞は of でも to でも可ということなのでしょう。 (大阪府 H. N.)

Ans. ご指摘の **handle** 名 1 の用例は G<sup>4</sup>では「a door ~ ドアの取っ手」に替えられていますので, まず記しておきます。結論から申しますと, 通例 of と to は文脈によってそれぞれ選択されると言ってもよいでしょう。ご質問は前置詞 of と to に関してのものですが, 前置詞 to に関しては, すでに小西友七『前置詞 (下)』(研究社, pp.104-105)に, 「Toは到着の意より, それに接触し結合することを示す。更に, 進んで, その附加, 附属物となり, それに随伴することを意味する。」とあり, その後に, (2)として“the key to my room”などの附加・附属の用例が示されています。いくつかの学習英英辞典の見出し語 **to** にも次のような用例が載せられています。

the key to the door / the solution to this problem (OALD<sup>7</sup>) [ cf. solution と problem の間に明確な動詞+目的語関係が内在する場合は of のみが用いられる。

— 小西友七『英語前置詞活用辞典』(大修館書店, 1974,

pp.1238-1239) ]

an answer to my question / the key to the back door (LDOCE<sup>4</sup>)

the key to his car / their response to your query (CALD<sup>3</sup>)

the answer to an important question / the keys to my desk (MED<sup>2</sup>)

the keys to the house (LAAD<sup>2</sup>) / the answer to everything (COBUILD<sup>5</sup>)

これらの用例を見ますと、ドア [車, 机, 家など]の鍵, 質問 [問題など] の (返) 答 [解決] に to が多く使用されていることが分かります。

小西友七『英語の前置詞』(大修館書店, 1975, pp.383-384) では、「建物・通路などのドア・入口をいう場合, of と to はしばしば交換して用いられる」とし、「the door of the room ではドアは部屋に附属する一部分としてとらえられているのに対し, the door to the room では the door leading to the room の感じで, 部屋に通じるドアの意に近い」と説明されています。また「箱のふたは the top of the box のように言えるが, 箱と対またはペアをなしているふたのようなとらえ方をすれば, the top to the box のように言う」の説明も追加されています。ご質問の用例“the broken handle to the desk’s bottommost drawer” は上で述べました附加・附属の用法に相当すると考えられます。筆者が尋ねたアメリカ人インフォーマントはこの用例で to の代わりに of を用いることは, drawerの修飾語句が長く, 多少違和感を抱くが, 文法的には acceptable であると述べましたので, 修飾語句のない“the handle of the drawer”であれば, 受け入れられやすいと思われます。また自分が最も使用する表現は the drawer handle であることも付け加えました。of の用法はあくまで全体と部分の関係を示す所有・所属の用法と考えてよいでしょう。一方, to の用法は意味的に of に接近する場合があるとしても, of とはその視点が異なり, その原意が方向「…へ, …に」を示すことから, belonging to, attached to, related to などの含意が感じられると思います。上の英文では「机のいちばん下の引き出しの壊れた取っ手」と言っても, 「しばらく前には引き出しにくっついていたが, 今では壊れて(離れて)しまった取っ手」のような意味が含意され

ているでしょう。

それで, 本欄回答者の中邑光男氏にお願いして, 次の (A), (B)について, 4人のインフォーマント(アメリカ人, カナダ人, イギリス人, ニュージーランド人各1人)に意見を求めていただきました。

(A) 次の3つの表現は文法的に容認されますか。

- (1) the handle of the drawer
- (2) the handle to the drawer
- (3) the handle on the drawer

(B) 次の2つの表現について, 違いが感じられますか。あなたならどちらの表現を使用しますか。

- (1) the broken handle of the desk’s bottommost drawer
- (2) the broken handle to the desk’s bottommost drawer

アメリカ人

- (A) 3つの表現は文法的にすべて acceptable である。the handle of the drawer の場合は, 所有・所属の用法で「引き出しの取っ手」を表し, the handle to the drawerの場合は, 「引き出し」の部品の1つとしての「取っ手」または「引き出し」を開けるための「取っ手」を表す。また, the handle on the drawer の場合は, 「引き出し」に取り付けた「取っ手」を表す。
- (B) (1)と(2)の違いについては, (A)で述べた of と to の相違と同じである。さらに, ofの方が simple であり, より normal でかつ betterである。

カナダ人

- (A) 個人的には3つの表現よりも, the drawer handle を用いる。3つの表現のうちからどうしても1つを選択しなければならないのなら, the handle on the drawer を選ぶ。さらに, 次の選択肢としては, やむなくthe handle of the drawer を選ぶだろう。
- (B) (1)と(2)の前置詞 of や to の代わりに, on を使用して, たとえば, He repaired the broken handle on the desk’s bottommost drawer. としたいし, さらに, 個人的には, the drawer handle を用いて, He replaced the broken drawer handle on the

desk's bottommost drawer. などと表現したい。(1)と(2)の表現は cumbersome で imprecise な感じがする。

イギリス人

(A) 3つの表現はそれぞれ次のような異なった文脈で使用されるだろう。

(a) She pulled the handle of the drawer so hard that it broke.

(b) I attached the handle to the drawer using two screws.

(c) He stuck the handle on the drawer with super-glue.

このように単一の存在物に言及する場合は、of を使用した(1)が最も好まれるだろう。そしてその場合、of は intimacy を暗示し、the handle は the drawer と緊密に結びつき、その結果、the handle は a part of the drawer となり、the drawer-handle または the drawer handle として用いられる。

(B) normal usage では of を使った(1)が好まれる。(2)の場合も、壊れた取っ手が引き出しから離されて、修理のため作業場などに持っていかれたとか、直せないほど壊れてごみ入れに捨てられたという場合には、なんとか使用されるだろう。いろいろな状況を考えると、個人的には、(1)の方を選択する。[ここで、筆者のコメントを付け加えますと、A Widow for One Year からの引用文では、まさしくこのイギリス人の判断どおり、壊れてはざされた取っ手を別の用途に使用しようとしている Harry の行動がこの後に描写されています。]

ニュージーランド人

(A) 3つの表現は文法的に acceptable で、意味の違いもない。個人的には、the drawer handle を使用する。

(B) of を用いた(1)の方を好むが、前置詞 on を用いた“the broken handle on the desk's bottommost drawer”の表現を最も使用するだろう。

以上、4人のインフォーマントの微妙な直感的判断も含まれる反応をご報告しました。筆者が尋ねたアメリカ人も含めて、「引き出しの取っ手」を英語で表す場合、the drawer handle が好まれることが明らかになりました

たが、このことは冒頭でふれましたG<sup>4</sup>での用例変更が妥当であったことが証明されることになりました。さらに、(B)では to を積極的に支持する人はいなくて、of を用いる人が目立ちましたが、カナダ人、ニュージーランド人は前置詞 on の使用を特に支持することが判明しました。

また Oxford University Google Search によりますと、the handle of the drawer は約2億700万、the handle to the drawer は約1億9800万、the handle on the drawer は約3億の頻度で見られ、Web上では on の頻度が顕著のようです。

最後に、今回の回答に関連することを参考のために追加しておきます。前置詞 of や to の目的語に人またはそれに順ずる名詞 [官職・職名など] が来る場合についての解説は『英語語法大事典 I』(p.280, pp.997-998), 『続・英語語法大事典 II』(pp.694-695), 『続・英語語法大事典』(pp.405-406)などを参照されるとよいでしょう。

8. hoist [ hoisted ] on one's petard について

Q. It is easy to judge the Tobias case as an example of being hoisted on one's own petard. (Laurie Garrett, “Sex and America’s State Department,” *The Japan Times*, May 11, 2007, p.14) (下線は質問者)

上記の英文の下線部は Shak., *Hamlet* (III. iv. 207) から取られたとの事ですが、『ジーニアス英和辞典』(第4版)のみならず、『研究社新英和大辞典』(第6版), 『小学館ランダムハウス英和大辞典』(第2版)も上記の英文中の on が by や with になっています。この場合、on でもよいのでしょうか。(福島市 M.A.)

Ans. 結論から申しますと、現在では((主に米))で前置詞 on も使用されています。この文語的表現はご指摘のように、Shakespeare, *Hamlet* III. iv. 206-207にある主人公ハムレットの言葉を元にしてしています。OED<sup>2</sup>の petard 名1にも1604年の例として、onではなくて、withを使用した用例が載っています。

*Brewer’s Dictionary of Phrase and Fable* (Century Edition, 1977, p.824)からその箇所を引用しておきます。

(1)For 'tis the sport, to have the engineer

*Hoist with his own petard* ;...

(砲術家を自分が仕掛けた爆薬で吹き上がらせることこそ楽しみの尤(ゆう)なるものだ。\_\_寺澤芳雄編『英語語源辞典』, 研究社, p.1056)

また *The Penguin Dictionary of English Idioms* (1986, pp.209-210)には, “The petard was a small bomb which was exploded to make a breach in a wall. Sometimes the military engineer firing the petard was blown up with it.” と説明されています。

この表現はその後, 決まり文句となり, by や with を使用した用例として, “blown up by his own bomb” の意で50年前の Margaret Nicholson, *A Dictionary of American-English Usage* (Oxford University Press, 1957, p.239)にも載せられています。

現在でも, 多くのイディオム辞典, たとえば, *Oxford Dictionary of Idioms* (1999, p.264)/ *Cambridge International Dictionary of Idioms* (1998, p.193)/ *Chambers English Dictionary of Idioms* (1996, p.250)/ *NTC’s American Idioms Dictionary* 1994, p.178)などにも見られます。参考のために, *A Dictionary of American Idioms* by Adam Makkai (1995, p.188)から比喩的に「(他人を陥れるために仕掛けた) わなに自分が掛かって」の意で用いられた1例を次に示します。

(2) Jack carried office gossip to the boss until he was *hoisted by his own petard*.

この用法に関して, William and Mary Morris は *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins* (Harper & Row, 1988, p.290) の中で, “Today it (=this phrase) is chiefly used to describe a person ruined by plans or devices with which he had plotted to ensnare others.” と説明しています。さらに, 学習英英辞典 *OALD*<sup>7</sup>/ *LDOCE*<sup>5</sup>/ *LAAD*<sup>2</sup>/ *MED*<sup>2</sup>/ *CALD*<sup>3</sup>/ *COBUILD*<sup>5</sup> などにも成句として be hoist [hoisted] with [by] your own petard のように記載されていますが, 手段・方法を表す前置詞 on を使用した表現は見当たりません。*Web*<sup>3</sup>(2002), *RHD* (1967), *RHUD*<sup>2</sup>(1993), *NODE*(1998) でも with と by のみが示されており, on がいつから使用され始めたかは今のところ明確ではありません。私が目にした on に言及している辞典は, *The World Book Dictionary* (1975), *Thorndike Barnhart Advanced Dictionary* (1973), *The Kenkyusha Dictionary of*

*English Quotations* (1968)と次の3冊のイディオム辞典でした。

『研究社—ロングマン イディオム英和辞典』(1989, pp.375-376)には, 元の英語版 *Longman Dictionary of English Idioms* (1979) にはなかった on が, be hoist with [on] one’s own petardとして追加されています。

*Collins COBUILD Dictionary of Idioms* (1997, p.295) には, “‘By’ can be replaced with ‘with’, and in American English you usually use ‘on’ . This is a formal expression.” の説明があります。

*Longman Idioms Dictionary* (1998, p.261)には, on の使用例と共に((米))で用いられることが明示されています。

上で述べた *The Kenkyusha Dictionary of English Quotations* (p.575)では, 英国のミステリー女流作家 Anthony Gilbert (本名 Lucy Malleon)(1899-1973)の作品の米国版 *Murder Cheats the Bride* (1945, xii) [英国版の題名は *The Scarlet Button*] からの次の引用に on が使用されています。

(1) This pale ghost of Peter opened his mouth. “This, I take it, is what is known as being *hoist on one’s own petard*,” he said.

筆者が尋ねたアメリカ人は by や with ではなく, on の使用のみが念頭にあり, この表現によって爆弾の上に吹き上げられたイメージが頭に浮かぶ, と述べました。

このように筆者の手元のイディオム辞典, 学習英英辞典には with や by を用いた例がほとんどでしたが, 現在では, Webで検索してみると, by, with, on をそれぞれ使用した例が多く見られます。Oxford University Google Searchでは, byが約147,000, withが約96,400, on が約96,300ヒットしました。By の頻度が少し高いですが, with と on はほぼ同じ程度に使用されているようです。G<sup>4</sup>の改訂時には「((主に米)) on」の追加を検討したいと思います。

## 9. sip at [on] one’s tea について

Q. 次の英文に sip on one’s tea が用いられていますが, 『ジーニアス英和辞典 第4版』(G<sup>4</sup>)の sip ④には「<人が> [酒などを/容器から] 少しずつ飲む [at / from] // ~ at liqueur リキュールをちびちび飲む。」とあります。

sip onも同様に使用してよいのでしょうか。

He finished the first piece of salmon, sipped on his tea, ate some gari and took up a second piece of saba. (Hillel Wright, “Kaiten Zushi,” *The Japan Times*, July 20, p.15) (下線は質問者) (福島市 M. A.)

**Ans.** 結論的には、onも用いられると考えてよいでしょう。周知のように、前置詞を用いたこの自動詞構文は動能構文 (conative construction) として知られていますが、学習英英辞典 LAAD<sup>2</sup> の sip ④には、“+on/at”の後に次の例が見られます。

(1) He ate his sandwich and sipped on a soda. (下線は筆者, 以下同じ)

また学習英和辞典では、例えば、『プログレッシブ英和辞典』(第4版)には sip ④に「(…を)ちびちびり飲む<at, on …>」とあり、『ルミナス英和辞典』(第2版)にも sip ④に「She sipped at [on] the wine. 彼女はワインを少しずつ飲んだ。」の用例が記されています。比較的新しく出版された『ロングマン英和辞典』(Pearson Education Limited, 2007)にも「b) ④ ちびちび飲む **sip at/ on sth** <…>をちびちび飲む」と明示されています。

ただ、学習英英辞典のOALD<sup>7</sup>, LDOCE<sup>5</sup>, CALD<sup>3</sup>, CO-BUILD<sup>5</sup>, AHESLDなどでは、④としては sip at の用例のみ載せられていますので、G<sup>4</sup>もそれに基づいて記述されたと考えられます。頻度の点からは、atの方がより多く使用されることが R. Huddleston and G. K. Pullum, *The Cambridge Grammar of the English Language* (2006, p.298)でも触れられていますので、次に示します。

(2) “The preposition is generally *at*, but *on* is sometimes also possible.”

筆者が尋ねたアメリカ人は自分が sip を使用する場合は、もっぱら他動詞として用いると言っていました。上述のHuddleston and Pullum (p.298)では他動詞と自動詞の意味上の違いを次のように説明しています。

(3) “The meaning difference between transitive and intransitive is perhaps not so clear here, but it can be brought out by noting that we can say *He nibbled his biscuit away* but not \**He nibbled at/ on*

*his biscuit away*. Compare similarly *She sipped her wine* vs *She sipped at her wine* : even the transitive involves little intake of wine, but it is still potentially greater than with the preposition.”

このように、他動詞構文と自動詞構文には微妙な差がありそうで、安藤貞雄『現代英文法講義』(開拓社, 2005, p.740)でも、(1) He sipped his orange juice. (2) He sipped at his hot chocolate. が取り上げられ、「(1)と(2)の文の差は微妙であるが、おおむね、(2)の文は熱意の欠如(a lack of enthusiasm)による不完全な達成を示唆していると言ってよい」と説明され、さらに、「chew, suck, sipなどの飲食動詞は on/at を伴うことができる。…しかし、これらの動詞は接触動詞(contact verb)とは異なり、達成はするものの、それが不完全であるか、熱意に欠けていることを含意する」と加筆されていることも参考になるでしょう。

Webを参照しますと、Oxford University Google Searchでは、sip at one’s teaは約176,000、sip on one’s teaは約121,000ヒットしましたので、G<sup>4</sup>の改訂時にはonの追加も検討したいと思います。

## 10. a half a dozen について

**Q.** 次のような英文があります。

On some days, Morrie had a half a dozen visitors, and they were often there when Charlotte returned from work. She (=Charlotte) handed it with patience, even though all these outsiders were soaking up her precious minutes with Morrie. \_\_\_\_\_ Mitch Albom, *Tuesdays with Morrie* (Sphere, 2007), p.102. (下線は質問者)

私は a dime a dozen の表現は知っていましたが、下線部の a half a dozen は初めて目にしました。この表現はhalf a dozenと同じ意味なのでしょう。もしもそうであるなら、『ジーニアス英和辞典』(第4版)の改訂版では、**half** ①の用例の a ~ dozen = ~ a dozen に、= a ~ a dozen と加筆してはどうかと思いますが、いかがでしょうか。 (大阪府 H. N.)

**Ans.** ご指摘の a dime a dozen はG<sup>4</sup>のdime ①の成句にもある、よく知られた((米略式))表現ですね。下線部

の表現に関しては、half a dozen, a half dozen, a half a dozen の3通りの言い方があり、頻度もこの順番で使用されています。「a half dozen の形は、半分の数量を1単位とみているため、a half-dozen のように書くこと」(『現代英語語法辞典』, p.558) もあります。ご質問の a half a dozen の形は「主に米国のくだけた口語で、a half a dollar, a half an hourなどの固定した表現に多い」(前掲書, p.558) と言われています。この表現は、30年以上前のPerrin and Ebbitt, *Writer's Guide and Index to English* (1972<sup>5</sup>, p.591) にも、すでに“an informal redundancy”と明示されています。

また、この表現については、『英語語法大事典』(p.343)でも扱われており、a half a ...が「おそらくhalfを「名詞」と感じて、つまりa half of a ...と言う気持ちから生じた」表現であろうということや‘Wrong’, ‘Quite common’の両極端の意見とその中間的な‘Careless colloquial or vulgar usage’の意見があることが提示され、アメリカ英語に多いことは事実であるとの解説がなされています。

Bryan A. Garner, *The Oxford Dictionary of American Usage and Style* (2000, p.165)では、“For this noun phrase, either a half dozen or half a dozen is good form. Avoid a half a dozen. When the phrase is used as an adjective, it becomes a PHRASAL ADJECTIVE that should be hyphenated <a half-dozen twirlers with the band>.”と述べられているように、学習英和辞典としては、もし入れるのであれば、ご提案のようにイコールで結ぶことは避けて、すでにG<sup>4</sup>にあるように、「a half an hourは((非標準))」などの語法注記として示すことでよいと考えます。

最後に、BNCからの用例を追加しておきます。(1), (3)では言いよどみ、繰り返しの現象が同時にみられることにも注意してください。

- (1) I've g I've got about a half a dozen sheets of paper scattered all over the place. (下線は筆者、以下同じ)
- (2) First to be cleared was a string of a half a dozen caravans.
- (3) And he, he possibly had done it at least a half a dozen times.

## 11. innit について

**Q.** innitに関して、『ジーニアス英和辞典 第4版』(G<sup>4</sup>)は次のような意味と例文を提示しています。

((英非標準)) ① [isn't itの代用として] …だろ、…だよな// We need to decide where to go first, ~? まずどこに行くか決めないとだめだろう。

改訂版では、[isn't itの短縮形]と書き改めてはどうかと思いますが、いかがでしょうか。

(大阪府 H. N.)

**Ans.** *NODE* のinnitを見ますと、((略式))でisn't itのcontractionとありますので、isn't itの「縮約(形)」、[短縮(形)]が相当すると考えられます。G<sup>4</sup>の改訂版では変更を検討したいと思います。この表現は、Frederic G. Cassidy, *Dictionary of American Regional English* (Volume III I-O, 1996, p.64) では、isn't itの“interrogatively exclamatory pronunciation-spelling”であり、また“the favorite, all-purpose tag-question in the Cheyenne [American Indian] dialect of English”でもあると説明されています。COD<sup>11</sup>では、次のように用例も挙げて解説されています。

“In informal, usually spoken, language innit has developed into a general-purpose ‘filler’ which is used to seek confirmation or merely for emphasis, as in I play it quite often, innit? (meaning ‘don’t I?’)” and you’d better hurry on over, innit? (meaning ‘hadn’t you?’)”

また、*Longman Grammar of Spoken and Written English* (1999, p.210)にも、“A particular interesting case is the use of innit which is derived from a regular question tag (=isn't it) and commonly occurs in BrE conversation.”とあり、さらに、この語法があまり多用されると非難されることもあることが付け加えられています。

## 12. by the skin of one's teeth について

**Q.** by the skin of one's teethという表現があります。この句は聖書が起源の表現です。『ジーニアス英和辞典 第

4版』(G<sup>4</sup>)にもこの表現は収録(p.1791)されているのですが、改訂時には〔聖書〕の表示を加える必要があると思いますが、いかがでしょうか。(大阪府 H.N.)

**Ans.** ご質問の表現はG<sup>4</sup>では **skin** 名 の成句として載っており、「((略式))かろうじて(narrowly), 危ないところで」の意味が記載されています。ご指摘のように、この表現は聖書に由来していますので、改訂時には〔聖書〕のラベルの追加を考えたいと思います。

この成句はThe Old Testament, Job 19:20の次の言葉が元になっていると言われています。

My bone cleaveth to my skin, and to my flesh, and I am escaped with the skin of my teeth. \_\_\_ *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* (Century Edition, 1977, p.1009) (下線は筆者、以下同じ)

参考のため、*The Holy Bible* (Revised Standard Version) by American Bible Society (1952, p.454)より、上述の箇所を引用しておきます。

“My bones cleave to my skin and to my flesh, and I have escaped by the skin of my teeth.”

なお、「この表現はGeneva Bible (1560)に初出で、ヘブライ語の直訳とされるが、原義の解釈に疑問があり、種々の説が提示されている」(寺澤芳雄『英語語源辞典』, 1997, p.1289) ようです。その1つを*The Kenkyusha Dictionary of English Quotations* (1952, p.109) から紹介しておきます。

“The original Hebrew seems far from clear here, the usually accepted interpretation being, that the taint of leprosy had attacked the whole of the sufferer's body, and left only the gums intact.”

さらに、この句はアメリカの小説家・劇作家のThornton Niven Wilder (1897-1975) が書いた喜劇 *The Skin of Our Teeth* (1942) の題名としても有名です。

## おわりに

一般に、質問に対する回答は、たとえ結論が同一になったとしても、人によって結論に至るプロセスや言語現象の捉え方などに関して違いが見られると思われます。英語および英語教育に関心を持たれる方に、この論考がいささかでも参考になれば幸いです。